

Histopathologic Analysis of Retrieved Thrombi Associated With Successful Reperfusion After Acute Stroke Thrombectomy

橋本, 哲也

<https://hdl.handle.net/2324/1959195>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (医学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	橋本 哲也			
論文名	Histopathologic Analysis of Retrieved Thrombi Associated With Successful Reperfusion After Acute Stroke Thrombectomy			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	飯原 弘二
	副査	九州大学	教授	北園 孝成
	副査	九州大学	教授	飛松 省三

論文審査の結果の要旨

脳血管内治療における血栓回収療法の登場により脳梗塞の原因となる脳動脈の閉塞血栓を体外に回収し病理組織学的に解析することが可能となったが、血栓回収療法後の有効再開通との間の関連については未だ不明である。当施設にて2010年12月～2015年7月までに血栓回収療法により治療した急性期脳梗塞連続142例のうち、回収血栓を病理組織学的に評価した急性脳主幹動脈閉塞83例を後方視的に調査し、回収血栓について粥腫成分の有無・器質化の有無・赤血球成分割合・フィブリン/血小板成分割合を評価した。有効再開通はmodified Treatment in Cerebral Ischemia gradeの2b～3と定義し、有効再開通に影響する血栓病理所見を解析した。有効再開通群(58例)は非有効再開通群(25例)よりも回収血栓の粥腫成分陽性率が少なく(3%対20%; $P=0.024$)、赤血球成分割合が多かった($57\pm 23\%$ 対 $47\pm 24\%$; $P=0.042$)。粥腫成分は有効再開通と負の関連があり(オッズ比0.062; 95%信頼区間0.002-0.864)、赤血球成分割合が多い血栓(>64%)は有効再開通と正の関連があった(オッズ比4.352; 95%信頼区間1.185-19.363)。血栓回収療法後の有効再開通の得られやすさは閉塞血栓の粥腫成分の有無と赤血球成分割合の影響を受けることが判明した。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。